

クラス番号	622	担当教員名	高山 京子
テーマ	精神障がい当事者の持つ、「生きづらさ」への理解		
著書・論文	<ul style="list-style-type: none"> ・生活アセスメント研究会『福祉・介護に求められる生活アセスメント』中央法規出版(共著)2007.11 ・日本福祉大学社会福祉学部日本福祉大学社会福祉開発研究所『日本福祉大学社会福祉論集』第125号「若手の相談支援専門員が必要としている研修の内容に関する基礎的研究(その2)～2年目のインタビュー調査の結果から～」木全和巳・高橋義久・高山京子共同研究 2011.9 		
研究課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・厚生労働科学研究費補助金(障害保健福祉総合研究事業)『障害者の相談支援にかかる人材養成に関する研究』分担研究「障害者ケアマネジメント従事者人材養成システムに関する研究(分担研究者:木全和巳)」共同研究(2009.4～2011.3) <p>【研究課題】障がい者の自己理解をすすめる“当事者研究”の実践</p>		

ゼミナール概要

キーワード：精神保健福祉 ソーシャルワーク 当事者研究 当事者理解

【目的】

学部の大講義室で行われる精神保健福祉関連の講義で必ず聞いたことがある、精神障がい者が抱える「生きづらさ」という言葉は何をさすのでしょうか。100人に一人が罹患すると言われ、精神疾患の代表格としてあがる統合失調症の中核症状の一つに、「認知の歪み」があります。認知が歪んでいると、その病を抱える人にどのような不都合が生じるのでしょうか。そして、それがどうして生きづらさにつながるのでしょうか。そんな平易な疑問の視点に降り立って、精神障がいのある人たちが抱える困難の一つ、「生きづらさ」について体感的に学ぶことを目指します。このことを通して、より当事者の側に軸足を置いた生活支援ができるソーシャルワーカーになることを目指します。

【方法】

人口13,500人弱の町、襟裳岬にほど近い北海道浦河町で約30年前から取り組まれている浦河べてるの家の実践に学びます。浦河べてるの家をご存知ない方もいらっしゃると思います。“べてるの家”とは、浦河町にある浦河赤十字病院の精神科病棟(通称“7病棟”)に長期入院を余儀なくされていた精神障がいのある方を、病院に着任したばかりの新卒のソーシャルワーカー向谷地生良氏の、本当に素朴な疑問から始まった退院支援、そして生活支援がスタートであり、今も続く営みとその拠点を目指します。その“べてるの家”で、特にこの10年ほどの実践の集大成として取り組まれている「当事者研究」の手法も用いて、精神障がいのある人の生きづらさを理解することを試みます。

授業計画：

前期は二つの課題に取り組みます。①医療福祉コース共通の学習テーマ、多職種連携の模擬カンファレンスが企画される予定です。当事者に関わる医療福祉の専門職に支援の実際をインタビューし、その上で当事者支援の場面の一つであるカンファレンスを設定して、それぞれの専門職の立場にたってみることに取り組みます。②文献や映像学習を中心に、浦河べてるの実践や、「当事者研究」を“知る”ことから始めます。べてるから出版されている文献やDVDの観賞を通して、また、この知多圏域で当事者研究に取り組む当事者にも登壇頂き、“生”の当事者研究のリアリティを体感します。

後期は卒業論文の執筆準備も行います。先行研究に触れながら、卒論のテーマの絞り込みを行っていきます。また、実際自分たちで当事者研究に取り組みます。研究の過程で見いだされる、自分の中にもある「生きづらさ」の感覚に気づけることを目指します。また、集中学習の機会として春合宿を予定します。皆さんの関心ある実践地への視察を通して、「生きづらさ」とは何なのか、に迫ってみたいと思います。

担当教員からのメッセージ



私は精神科病院(精神科と内科、特に結核の入院施設のある病院)のソーシャルワーカーとして勤務、社会福祉実践を開始しました。その後嗜癖問題専門クリニックのソーシャルワーカー、社会復帰施設の精神保健福祉士を経て、今は地域での精神障がい者支援に取り組む、20数年の“現場人間”です。学術的な学習指導は苦手ですが、現場リアリティ、特に当事者の側に立った支援の学習指導にはこだわりたい。このゼミでは決して狭い意味での専門援助に閉じない支援が目指せる人“財”を養成したいと思っています。「事に対しては批判的に関わり、人に対しては常に肯定的に関わる」ことを目指します。エントリーシートには、このゼミで何を学び、何をを目指したいか、について是非記入ください。